



Vol.15
March 2012

A r t & C u l t u r e



大学院文化政策研究科長

高田和文

Kazufumi Takada

”永遠の都”か”不思議の都”か

「イタリアの町でどこがいちばん好きか？」とたずねられることがある。それに答えるのは、実はかなり難しい。よく言われるように、イタリアの都市はどれも個性的だから、いろいろな町を知れば知るほど、それぞれの良さが分かって答えにくくなる。それでも強いてどこかと問われれば、やはり長く住んだローマを挙げたい。大学時代の留学が2年、大使館勤務が3年、そして日本文化会館勤務が2年8か月、計8年近く暮らした。

ただ、長く住んでいたわりには、今でも未知の部分が多い。むしろ、捉えどころのない複雑さこそが、ローマの魅力と言っている。それがどこから来るかと言えば、やはり歴史の長さだろう。ローマに先立つエトルリアの文化やイタリアを支配する前の王政ローマについて、日本ではあまり語られることがない。90年代にイタリアで大ヒットしたミュージカル『ローマの七王』は、その王政時代を背景にした作品だった。主演のルイーダ・ブローニエティは今なお国民的人気スターである。王政の次によく知られる共和政の時代があり、帝政ローマへと続く。一口に古代ローマと言っても千年以上の長さがあり、それぞれの時代の刻印がローマの町に残されている。

その後、中世、ルネッサンスから近代へと至るが、ここでもローマは長くヨーロッパ世界の中心に位置した。ローマ・カトリックの総本山であり、文化の発信地であった。強いて言うなら、古代においては地中海全域の覇者であったが、中世以降は西ヨーロッパ世界の中心となり、近代以降はイタリアという一国の首都に収まってしまった。つまり、その影響力の及ぶ範囲が歴史とともに狭まってきたことは否めない。それでも、古代から現代まで一貫して一地域の中心的役割を担ってきた都市は他に例を見ない。作家の塩野七生氏はローマを「不滅の娼婦」にたとえている。古代ローマ皇帝、ローマ教皇、そして統一国家イタリアと、次々にパトロンを代えながらしぶとく生き抜いてきたというわけだ。過去のあらゆる時代の文化と記憶の集積の上に現在のローマがあり、その実体をつかもうとすると生半可な知識では太刀打ちできない。とりわけ、異邦人である私たちは、背後にある歴史の重みにただ圧倒されてしまう。

数日の旅行なら、コロッセオやパンテオンで古代ローマの巨大建築を目の当たりにし、サン・ピエトロ寺院、バチカン

CONTENTS

巻頭寄稿	1
活動報告	2~7
インフォメーション	8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター

静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533

●Tel:053-457-6113 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

美術館でルネッサンス、バロックの美術を見るのが精一杯だろうか。もう少し時間があれば、ボルゲーゼ美術館やカピトリノ美術館、さらにはカタコンベや郊外のティヴォリ、ハドリアヌス帝別荘、オステリア・アンティーカにまで足を伸ばせるかもしれない。しかし、無数にある市内の教会のうち主なものを訪れるだけでも相当に時間がかかる。ある時、『芸術新潮』がローマにある中世モザイク画の特集を組んだが、それをたどるだけでも何日もかかったのを覚えている。余談だが、その記事の中に「モザイク画は動かせない。だからこちらから出向いて行くしかない」とあったが、けだし名言である。ローマを観光するなら、まず「動かせない」ものを見るべきだと思う。

ローマにはまた、トレヴィの泉でコインを投げる、「真実の口」に手を入れて写真を撮る、あるいはスペイン広場の階段を歩いて降りる（アイスクリームを食べながら歩くのは残念ながら今は禁止）といったパフォーマンス型の観光スポットもある。コンドッティ通りでのショッピング、レストラン、バルでの食事とコーヒータイム、そして広場や市場で多少とも人々の生活に触れたりしていたら、あっという間に1週間は経ってしまう。

あまり知られていないが貴重な美術館や教会は多い。印象に残っているのは、コルソ通りから少し入ったところにあるドリア・パンフィーリ美術館だ。膨大な数の絵を広間と廊下の壁にびっしり並べるといって、普通の美術館では考えられない展示に驚いた。しかも、超一流の名画はほとんどない。（実は、カラヴァッジョやフィリッポ・リッピがあるのだが、他の作品に埋もれてほとんど印象に残らない）。その量のすさまじさに、西洋美術の別の一面を見たような気がした。

ローマの町の捉えどころのなさは、単に歴史の長さだけによるのではない。例えば、一方通行、進入禁止、ZTLと呼ばれる車両通行禁止区域が複雑に入り組んだ道路。しかも、そこを車、バイク、バス、市電、自転車、さらに観光用馬車が並んで走る。迷路のようなローマの町で運転するのは至難の業だ。バス路線も複雑に入り組んでいて、普段乗っている人にしか分からない。そのうえローマ市は最近、自転車の乗り捨てレンタルシステムまで導入した。

もう一つ、ローマに暮らす人々の多様性も挙げられる。さまざまな階層、出身地のイタリア人、近年急増した外国人、さらに世界各地から集まる観光客。言葉も考え方も目的も違う大勢の人間がひしめき合っている。テルミニ駅南側のヴィットリオ広場付近は、もう何年も前からチャイナタウンの様相を呈している。インド料理やアジア料理の店も多い。大半は中国人の経営だが、寿司バーも盛況である。ローマ市も「多文化都市」に向けての政策を打ち出している。

そのローマが2020年のオリンピック招致を断念したという。財政危機に苦しむイタリア政府が財政保証を拒否したためである。ここ数年、大規模な都市再開発に力を入れてきたローマ市の政策が少なからぬ影響を受けるのは間違いないが、ローマの人々にはそれもまた長い歴史の1コマと映っているのではないかと。

吉田喜重・岡田茉莉子講演会

木下千花(文化政策学部芸術文化学科)

2011年10月28日、吉田喜重監督と女優・岡田茉莉子さんを本学講堂にお招きし、「廃墟からの眼差し、語りの力」と題して講演していただいた。講演に先立ち、お二人の長編映画におけるコラボレーションとしては最新作である『鏡の女たち』(03)を上映した。吉田監督は、松竹大船でのデビュー作『ろくでなし』(60)が大島渚らの作品と共に日本の「ニューヴェルヴァーグ」として脚光を浴び、『エロス+虐殺』(70)や『戒厳令』(73)で政治と性の問題をラディカルな形式で世に問い、劇映画、ドキュメンタリー、舞台、批評とメディアを往還して現在まで活躍を続ける日本を代表する映像作家である。吉田監督の公私に亘るパートナーである岡田茉莉子さんは、無声映画の伝説の名優・岡田時彦を父に、タカラジェンヌを母として生を受け、日本映画の黄金期に東宝・松竹のスターとして銀幕に君臨し、舞台・テレビにも進出、近年も青山真治監督『エリ・エリ・レマ・サバクタニ』(06)への出演、自伝『女優 岡田茉莉子』(09)の出版、舞台『女優』(10)主演など、話題は絶えない。そんなお二人の上映会・講演会には、学外からも多くの方々がご来場下さった。

「廃墟からの眼差し、語りの力」というタイトルには、「3.11後」の世界への思いが込められている。『鏡の女たち』は、広島で被爆した女性(岡田)を主人公に、三世代の女性がアイデンティティを模索する過程を通して、表象可能性の限界と映画メディアの倫理を問う。原子力と人間の関係が問い直されている現在、この作品はある意味で公開時以上のアクチュアリティを獲得し、被災者・犠牲者にカメラを向けること、他者の、あるいは自らの体験について物語ることの責任について、更なる思考への糸口を与えてくれる。ドキュメンタリー作家で批評家のマルコ・マッツィさんも、芸術としての映画の倫理について語ってくれた。お二人は、題名の問いかけに答えるばかりではなく、福井(吉田監督)と新潟(岡田さん)でのご自身の戦争体験をお話になり、客席の深い共鳴を呼んだ。原爆ドームを前に被爆体験を語る『鏡の女たち』のクライマックスでは、亡くなられた方々が自分の身体を通して語っているような、不思議な経験をしたと岡田さんは言う。楽屋で近しくお目にかかっても美しい岡田さんだが、「語りの力」について舞台上でお話しになると、言わば「憑依」する「女優」の輝きは目がくらむばかりだった。

お二人と浜松の接点として、浜松出身の映画監督・木下恵介(1912-1998)を忘れてはならない。浜松駅に到着されたお二人は講演会の前に木下恵介記念館に足を運ばれ、齋藤卓館長の歓迎を受けた。吉田監督は『夕やけ雲』(56)から木下監督に助監督として付き、脚本の口述筆記も務めた。岡田さんは『春の夢』(60)『今年の恋』(62)『香華』(64)の木下作

品に主演している。お二人の仲人でもあった木下監督については講演会でもエピソードが尽きず、松竹一の大監督だった木下恵介のプロフェッショナルとしての存在感が生き活きと伝わってきた。吉田監督は、助監督として加わった木下監督『喜びも悲しみも幾年月』(57)、やはり木下門下の川頭義郎監督『涙』(56)のロケで浜松に滞在したことを懐かしく思い出されるという。

本企画は、2011年度文化・芸術研究センター長特別研究費によって可能になった。三枝成彰センター長をはじめ、センター、事務局のスタッフにまずは深く感謝したい。国際文化学科の土肥秀行(本企画の頭脳かつ実働部隊)と私は、外部からビッグなお二人を呼んで打ち上げ花火のように終わる一発イベントではなく、「特別研究」の名に相応しいものにするため、様々な戦略を練った。まず、芸術文化学科の専門科目「文化政策特論A」(2011年度前期、木下担当)では、社会と映像芸術の結節点として「スター」に着目し、そのケース・スタディとして岡田茉莉子を分析した。二十人を超える受講者が『女優 岡田茉莉子』を読み、成瀬巳喜男監督『流れる』(55)、岡田さんが自ら出演百作記念作品として企画した吉田監督との初コラボ『秋津温泉』(62)を鑑賞した。受講者が書いた「岡田茉莉子さんへの手紙」はご本人にも届けられた。講演会に先立って岡田・吉田ポスター展を本学ギャラリーで開催し、お二人のキャリアを本学のコミュニティで紹介するばかりではなく、吉田監督の著書の外国語訳、マッツィ氏が吉田監督へのインタビューを中心に構成したビデオ作品も展示して、お二人のグローバルな存在感を伝えた。

そもそも、本企画は人と作品のグローバルな「出会い」に端を発している。土肥は吉田監督の小津安二郎論のイタリア語版の翻訳者(08)であり、ボローニャをはじめイタリア諸都市で行われた吉田作品の回顧上映にあたっては中心的な役割を果たしていた。芸術文化学科の高田和文は回顧上映当時、ローマの日本文化会館長であり、当日、お二人とは楽屋で旧交を温めていた。私もまた、吉田作品について論文を書いたことをきっかけに、2005年にアメリカのシカゴ大学で開かれた「政治的モダニズム」シンポジウムで吉田監督とご一緒した。しかし、こうした繋がりが本学で実を結んだのは、地元の底力のなせる技である。『鏡の女たち』の35mm上映は、シネマ・イーラの榎本雅之支配人のご助力なしにはあり得なかった。会場でのお手伝いを買って出た下さったはままつ映画祭のボランティアの方々、企画段階から当日まで様々な形で運営を支えてくれた学生諸君に感謝して筆を置きたい。

活動報告

スポーツ文化シンポジウム

溝口紀子 (文化政策学部国際文化学科)

静岡県では、「静岡県スポーツ基本計画」のなかで「スポーツ王国しずおか」を掲げ、誰もが生涯を通じて、いつでも、どこでも、いつまでも気軽にスポーツを楽しみ、さらに国内外で活躍できる競技レベルの高い選手を育成することを目標としている。特に県民の希望や適性、能力などに応じて、生涯にわたってスポーツに親しむことのできる「生涯スポーツ社会」の実現を目指している。加えて本年度はスポーツ振興法からスポーツ基本法へ50年ぶりに法改定され、日本のスポーツにおける転換期であるといえよう。

そこで今回、企画したスポーツ文化シンポジウムでは、静岡県のスポーツ文化の伝統や特徴を再確認しつつ、フランスにおけるスポーツ文化の形成過程や特徴と比較しながら、「スポーツ王国しずおか」の文化特性、スポーツ文化の社会的意味を明示し新たなスポーツ文化の創造について提言することを目的とした。テーマは「地域スポーツ文化の創造」とし、本学特別客員教授玉木正之氏、地元企業のスポーツ関係者として、清宮克幸氏（ジュビロヤマハララグビー監督）、さらにフランススポーツ歴史家であるブルッス教授（ボルドー大学）を交え、2回に渡ってシンポジウムを開催した。

第1回 「地域スポーツ文化の創造」

日時 平成23年8月6日（土） 15時～17時

会場 静岡文化芸術大学講堂

参加者 約150名

パネルディスカッション

パネリスト 玉木正之（静岡文化芸術大学招聘客員教授）

清宮克幸（ヤマハ発動機ラグビー監督）

溝口紀子（静岡文化芸術大学准教授）

コーディネーター 澤木久雄（SBS静岡放送アナウンサー）

先ずシンポジウム開催にあたり本学鈴木善彦理事（総務担当）からご挨拶をいただいた。次に各パネリストが「思い出の一枚の写真」を披露した。特に清宮氏は、早稲田大学ラグビー部監督時代の集大成となった2006年度日本選手権早稲田対トヨタ戦で勝利した瞬間を紹介し、会場を盛り上げた。引き続き「静岡スポーツの現状と将来」についてパネリストから意見がだされた。施設や気候に恵まれている静岡のスポーツ環境の素晴らしさについて触れ、玉木氏は「2月のプロ野球のキャンプ地として鹿児島などと比較しても 実は気候的には静岡が一番」と力説していた。また清宮氏からは「新聞に地域スポーツの活躍の結果が掲載され、誰もがヒーロー、ヒロインになりやすい」と静岡ならではのスポーツメディアの特徴について言及された。それを受け澤木氏から「恵まれた環境を充分活用されているとは言い難く全国や世界の舞台での活躍が少ない。それはなぜか？」と問題提起された。「市町村対抗駅伝が異常なほど盛り上がる。悪いことではないが、ローカル意識が強すぎ視線が内に向き過ぎていると感じる」、「もっと全国や世界に目を向け、ローカル同士が力を合わせる必要がある」など意見がだされた。特に清宮氏は「浜松・磐田のスポーツ界には非常に潜在的な可能性を感じる。これまで日本のスポーツ界は企業が支えてきたが、企業スポーツはいずれ無くなる。新しいスポーツ

文化を育てる必要がある」と断言した。まさに企業スポーツを中心に発展してきた静岡のスポーツ、日本スポーツ界へ一石を投じる発言であった。参加者から「スポーツ行政のあり方を再考することができた」「企業に依存しすぎないスポーツのあり方を考えたい」「次回開催を楽しみにしている」などの高評を頂いた。

第2回 「日仏におけるスポーツ文化の社会的価値」

日時 平成23年11月18日（金） 14時40分から17時50分まで

会場 静岡文化芸術大学 南棟1階 176大講義室

参加者 約100名

第一部 特別講義 ミッシェル・ブルッス（ボルドー大学）

「フランスにおけるスポーツの社会的価値」

第二部 パネルディスカッション

「日仏におけるスポーツの社会的価値」

パネリスト ミッシェル・ブルッス（ボルドー大学）

玉木正之（静岡文化芸術大学招聘客員教授）

コーディネーター 溝口紀子（静岡文化芸術大学准教授）

逐次通訳 石川清子（静岡文化芸術大学教授）

第2回スポーツ文化シンポジウム「日仏におけるスポーツの社会的価値」を開催した。冒頭、山本幸司副学長よりボルドー大学のミッシェル・ブルッス教授を紹介の後、同教授が、「フランスにおけるスポーツの社会的価値」をテーマに特別講義を行った。フランス社会においてスポーツがどのような社会的価値を見だしてきたかについて歴史社会学の手法を用いて以下3つの視点から述べられた。

- ① 貴族の余暇からクーベルタンが登場し、近代オリンピックが構築された。
- ② 産業革命により自転車が普及し、新聞社のスポーツ興行としてツール・ド・フランスが開催されたことによりメディア・スポーツが誕生した。
- ③ 第二次大戦中ヴィシー政権による国家の介入と人民戦線、戦後ドゴールの第5共和制からスポーツ省が設立された。

講演にあたり、スポーツ歴史家の視点から数々の貴重な資料を提示しフランススポーツの社会的価値について明快に解説した。第二部は玉木正之特別客員教授を交え、パネルディスカッションをおこなった。日仏のスポーツ文化の相違、共通点を見だし、最後に「スポーツの民主化」という課題点を明示することができた。本学の学生、教員だけでなく県外のスポーツ関係者からも、たくさんの質問が飛び交い充実したシンポジウムになった。

シンポジウム開催にあたっては、パネリストの方々、本学教職員のお力添えを多分に頂戴し大盛況、成功裏に終了することができた。心からお礼を申し上げたい。

このシンポジウムは、平成23年度学長特別研究の助成を受けて開催した。

日本語教育事業

広瀬英史（文化政策学部国際文化学科）

日本語教育の現状

日本語教育における現状の課題は多岐に亘っている。キーワードを挙げることで、これを示したい。

異なる対象者：定住外国人、外国人児童生徒、生活者としての外国人住民、留学生、研修生など

地域の問題：集住地域、分散地域

教育の問題：異文化教育、多文化教育、日本文化教育（生活上のきまり含）、学校における教科教育、職場における技術教育、母語（親が使う言語）の教育など

日本語教育に関する施策、運営を行っていく上で、幅広い観点から検討を加えていく必要がある。これら全てが日本語教育機関や団体が解決し、取り組んでいく課題となる。

私たちは、現在、1) 地域との連携、2) 学生教育という2つの大きな柱を立て、日本語教育を含む多文化共生のまちづくりに向けた活動を行い、その中でこうした課題に取り組んでいる。

1) 地域との連携

本学特別研究「外国人市民の社会参加に向けた多文化共生のまちづくり」「外国籍児童が占める割合の高い浜松市立砂丘小学校における特別支援教育のあり方についての実践的研究」として、外国人児童生徒と生活者としての外国人住民を中心とした支援（実践）を行うと同時に、その支援の在り方や体制について考えてきた。特に、政策的な面では池上重弘教授（文化政策学部国際文化学科）が中心となって進め、現在、外国人児童生徒の学習支援に関して、市内のNPOやボランティア団体などが実務者レベルで課題を共有するためのフォーラム設置に向けて大きく舵を切ったところである。

また、平成23年度は、文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業（日本語指導者養成）として、「日本語指導者の育成とその支援組織づくり」というテーマで3回にわたって、シンポジウム／セミナー／ワークショップを開催した（詳しい報告は報告集を参考にされたい）。

第1回目（10/10）は「『地域型』日本語教育の在り方を探る」、第2回目（12/15）は「外国人児童の笑顔のために—学校がすること、担任・担当ができること—」、第3回目（2/4）は「外国人学習者の未来への歩みにむけて—外国人児童生徒、労働者、生活者の指導体制や研修制度から学ぶ—」というテーマで行った。この業務は①対象を区別した日本語教育（大人と子ども、労働者と生活者）、②地域に合わせた日本語教育の模索とその実施方法とノウハウを学ぶ、③バイリンガル指導員を含む日本語指導員の育成を目的に行った。毎回、70～100名の参加者があり、この分野における本学への期待の大きさを感じた。そして、3回のシンポジウム／セミナー／ワークショップを通して、浜松を中心とした日本語教育に携わる多くの人々が意見交換を行い、「地域型」日本語教育にあった新しいタイプの日本語教師の育成とその在り方について検討できたことは大きな成果である。今後の支援組織づくりの礎を築くことができたといえる。

2) 本学の日本語教員養成課程（学生教育）

日本語教員養成課程は多くの大学で見られる。最初に上げた

ように、日本語教育の課題が多岐に亘るため、日本語教育が多様化し、それに合わせて各大学の動向も多様化している。従来から行われている研究者または専門家教員養成を主とした日本語教育を行う大学、コーディネーターの養成を主とした日本語教育を行う大学、多文化社会に貢献できる人材の育成を主とした日本語教育を行う大学、また、新しいところでは、教員養成系と合わせて日本語教育を取り入れる大学、そして、日本語を母語としない人（非母語話者）を対象とした日本語教師の育成を主とした大学も見られる。

本学は、多文化社会に貢献できる人材の育成を主とした日本語教育である。本学の日本語教員養成課程カリキュラムの特色は、多文化共生社会を念頭に置いて日本語教育を学ぶ点と、地域に根ざした日本語教育を学ぶ点にある。

多文化共生社会の学びとして、国際文化学科専門科目である「多文化共生系」の科目がカリキュラムの中心となり、構成されている。この学びを通して、「語学習得は容易ではない」「覚えるメリットとは」など相手の立場で考えることや相手の負担について理解できるようになる。そうして、「どうしたら日本語を学んでもらえるのか」を考えていく。たとえば、「災害時のラジオ放送の対応として、多言語よりも易しい日本語が効果的だ」という報告がある。この場合でも、「災害時に備えて、日本語を学ぶことが大切である」と学習者に日本語学習を強いるばかりでなく、ラジオもテレビも統一したセリフや言い回しで伝えることや、そのための日本語表現集をつくるなど、日本語を話す人々からの配慮や工夫は、外国人支援の有効な手段となる。

地域に根ざした日本語教育を学びとして、本学では長期間の実践が用意されている。しかも、大人と子どもという異なる学習者を対象とした実践が用意されている。

こうしたカリキュラムを外国人集住地域のこの浜松で学ぶことは、今後、まち全体を見渡す広い視野、複雑な問題に取り組む上で必要な複眼的な視野、そして、実践力を備えた人材として、日本語教育に貢献できるようになる。（図参照）。



最後に

私たちが行っている2つの大きな柱は、別の視点から見れば、現在の活動であり、かつ、未来への活動ともいえる。この活動によって、「多文化共生のまちづくり」から、「多文化共生」という言葉が消え、「多文化共生」が当たり前、意識もしないという、まちになることを願っている。

活動報告

はままつユニバーサルデザイン国際シンポジウム： 市民協働によるこれからのユニバーサルデザイン — 私にできることは？ —

古瀬 敏 (デザイン学部空間造形学科)



文化・芸術研究センター長特別研究実施の一環として、2012年2月9日午後には本学講堂において、はままつユニバー

サルデザイン国際シンポジウム2012を開催した。

誰にとっても住みやすく、暮らしやすい浜松市にするために、私たち市民一人ひとりがどのようにすれば持てる力を発揮できるか。市民と協働で策定中の第2次浜松市ユニバーサルデザイン計画の中では、UDの実践に向けて市民協働を中心に据え、市民のより積極的な関与が期待されている。この点を広く市民にアピールするのが市役所の希望であり、一方本学としては、これまでどおりユニバーサルデザイン研究の中心になっていくことを表明するのが今回のねらいであった。

シンポジウムは、浜松市山崎副市長と本学河原林副学長のあいさつに続いて、スペインのバルセロナに本拠地を置いているデザインフォアオール財団会長のフランチェスク・アラガイ氏より、「ヨーロッパにおけるユニバーサルデザインの動向」について講演があった。国連の障害者権利条約をほとんどの国が批准している状況の下で、2020年の到達目標が説明された。休憩を挟んで、昭和女子大学学長の坂東眞理子氏からは、「これからの日本でのユニバーサルデザインの課題」と題して、これまでの豊富な経験を交えて、ハードの整備だけではうまくいかないとの指摘がなされた。

再度休憩の後、パネルディスカッションが開始された。ユニバーサルデザインを施策の中心に据えて積極的に取り組んでいる3つの自治体から、異なった立場を代表するパネリストに登壇願った。まず浜松市からは来年度から第二期に入る「ユニバーサ



ルデザイン計画」の策定会議会長を務めている杉浦政紀氏から、浜松市におけるこれまでの経過と今後の方向が述べられた。次いで、佐賀県健康福祉本部長の平子哲夫氏より、佐賀県が行ってきたさまざまな施策について紹介があった。3人目は岩手県立大学社会福祉学部狩野徹教授で、とくに岩手県では東日本大震災への対応がどうなされているかについての話題提供をお願いした。

こうした発表を受けて、ユニバーサルデザインをさらに深め実効のあるものにするためにはどうすればいいかについて意見を交換した。そのなかで、ヨーロッパなどでは強力な法規制を伴うかたちで進める合意がなされているのに対して、我が国ではどの程度までそれにならうことができるだろうかという点が議論になった。もう一つの論点は、大規模災害時の対応についてである。東日本大震災が起きる前は、災害時にあってもユニバーサルデザインの基本理念がきちんと満足されるかどうかについてあまり意識されてこなかったが、基盤ができていなかったところのほうが災害後の問題も大きかったのではないかと、また、これを教訓に災害にも強いユニバーサルデザインを整備していくべき、との指摘もあった。まとめとして、浜松市の次期計画がいみじくも述べているように、ハード、ソフト、ハートという3つ、きちんとした環境整備、仕組みそして人々の意識改革があいまって初めてうまくいくであろうとの総括がなされた。

なお、本年度も昨年度に引き続いて「ユニバーサルデザイン絵本コンクール」を実施したが、その表彰式を2月11日に行うのに先立って、シンポジウムの講演者とパネリストにはシンポジウム終了後にプレビューしてもらった。小学生から大学生まで、さまざまな視点から自分の考えるユニバーサルデザインを絵本の形にまとめた応募作品はそれぞれに特徴があったが、来年度はもっと多くのところに応募を呼びかけるための方策を考えている。



地域とつながる演奏会 室内楽演奏会2011

平成23年度後期には「室内楽演奏会2011」4公演を開催した。このうち11月の金原明善翁生家での公演と12月の本学ギャラリーでの公演は、浜松市文化振興財団のサポートを受けて実施し（「はままつ文化サポート事業」）、前期の2公演に引き続き地域の文化資源の活用をテーマにした音楽会であった。

12月22日には「静岡文化芸術大学『イタリア語教育の拡充』研究プロジェクト」と連携して演奏会「ナターレ2011 声楽の夕べ」を、「室内楽演奏会2011」スタッフが実行委員を兼ねる「SUAC for Japan “浜松から大船渡へ”音楽活動支援」実行委員会が開催し、本シリーズの特別公演とした。この公演を含め本年度「室内楽演奏会」などの機会に寄せられた募金を活用して、上記実行委員会はその後2012年2月には大船渡市の小学校5箇所8校で、音楽の授業に代わる演奏会を行っている。

今年度の事業を通じて、少人数の演奏者のライブを送り届ける事業が今日的課題であることを、学生・教職員からなるスタッフ全体で改めて確かめることになった。携帯音楽プレイヤーが普及し、音楽を身近に感じる／身につける時代においてこそ、西洋芸術音楽に限らず第一線で活躍する音楽家の「息づかい」に触れる体験が重要なのである。

地域のさまざまなコミュニティとの連携を目標とした本年の事業としては当然ながら、学外の多くの方々にご支援・ご協力頂くことになった。また各公演の当日には、来場者の方々からアンケートなどの形での確かなアドバイスを頂いている（ちなみにアンケートの回収率は毎回高い）。こうして、企画・運営を担当した学生が毎回さまざまな学びの機会を頂いていることに対して、この場を借りて深く御礼申し上げる。

以下は「ナターレ」以外の3つの公演に関する、各公演の学生スタッフによるレポートの縮約版である。

小岩信治(文化政策学部芸術文化学科・演奏会シリーズ監修者)

1. 金原明善翁生家で聴く～マンドリンと薩摩琵琶の奏で～ (2011年11月6日13時半開演)

- 出演：柴田高明（マンドリン）、清川嵐舟（薩摩琵琶）
- 会場：金原明善翁生家（浜松市東区安間町）
- 演目：マンドリン；G. レオーネ《アリアと変奏曲第4番》ほか、薩摩琵琶；《城山》

○浜松の偉人、金原明善翁の生家は築後約200年となる古民家。2011年4月にリニューアルされ、現在は一般開放されている。生家は旧東海道沿いに立地し、明善翁が生きた時代（江戸末期～大正期）は日本の東西文化が交流する場所であったことから、西洋の弦楽器マンドリンと東洋の弦楽器薩摩琵琶の公演を企画した。

○前半にマンドリン、後半に薩摩琵琶の演奏を行った。東西の弦楽器の音色は明善翁生家の和室の空間にマッチし、演奏者と観客の距離も近く、コンサートホールでの公演と

は違う面白さがあった。奏者自ら楽器の歴史や奏法などについて説明し、また会場からの質問を受けたこともあり、演奏者と観客との交流という点でも好評であった。

荒木菜摘(芸術文化学科2年、室内楽演奏会スタッフ)

2. 相曽賢一朗 ヴァイオリン・リサイタル2011浜松公演 (2011年11月27日14時半開演)

- 出演／相曽賢一朗（ヴァイオリン）、アリスター・ビートソン（ピアノ）
- 会場：静岡文化芸術大学講堂
- 演目：ベートーヴェン《ヴァイオリン・ソナタ第6番》イ長調作品30-1、サラサーテ《チゴイネルワイゼン》ほか
- 相曽賢一朗はロンドンを拠点に活躍するヴァイオリニスト。リサイタル前半は、ヴァイオリン・ソナタの名曲を2曲、後半は出演者による演目紹介を交え、演奏時間の短い小作品集が演奏された。このヴァイオリン・リサイタルの本学での開催は今回で3回目で、聴衆は世界を舞台に活躍する演奏者の質の高い好演に聴き入った。
- 今回は開演時間が日曜の14：30ということで、小中学生も来場しやすく、また浜松こども館の託児サービスを利用できる時間帯であったため、「開演時間がちょうど良い」という意見が多かった。

蒔田佳純(芸術文化学科1年、室内楽演奏会スタッフ)

3. SWEETS CONCERT(2011年12月7日18時15分開演)

- 出演：波多江史朗(サクソフォン)、羽石道代(ピアノ)
- 会場：静岡文化芸術大学ギャラリー
- 演目：セザール・フランク《ソナタ》より、アストル・ピアソラ《リベルタンゴ》ほか
- 協力：学校法人ミズモト学園東海調理製菓専門学校。
- スイーツのお土産付きコンサートという新しい試み。演奏後の「スイーツタイム」にお菓子を食べながら、公演に集まった人々が交流した。演奏者は毎年夏の「浜松国際音楽器アカデミー&フェスティバル」でも知られるサクソフォニスト・波多江史朗氏とピアニスト・羽石道代氏。初めて演奏会に足を運ぶ方にも楽しめるよう配慮された曲目は、クラシック、ジャズ、サクソフォンのオリジナルピースなど多岐にわたり、また大森ピアノ社（磐田市）から借用した赤色(ワインレッド)のピアノが異彩を放った。
- 「スイーツタイム」は本学近隣の東海調理製菓専門学校とのコラボレーション企画。同校の学生製作による洋菓子（ビッシュ・ド・ノエル、シュトーレン）を振る舞い、クリスマス前らしい雰囲気に包まれた。
- 初めて演奏会に足を運ぶ学生から本学室内楽演奏会を毎回聴きに来てくださるお客様まで多くの方が、サクソフォンの演奏を近くで聴くことができるともよかった、という感想を残している。「スイーツ効果」によって来場されたお客様にも生演奏の良さが伝わったことがアンケートからも読み取られる。

望月成美(芸術文化学科3年、室内楽演奏会スタッフ)



活動報告

第6回静岡国際オペラコンクール開催される！

静岡国際オペラコンクール実行委員会事務局

「第6回静岡国際オペラコンクール」(主催：静岡県、静岡県教育委員会、浜松市、本学他)は、11月12日(土)から24日(木)までアクトシティ浜松大ホール等を会場に開催され、世界15の国と地域の177名の応募者の中から、予備審査(6月7～9日、本学)を経た62名の若手オペラ歌手が浜松の地に集まりその実力を競い合いました。

さきの東日本大震災により本コンクールへの影響も懸念されましたが、多くの関係者の皆様のご尽力を頂き無事に開催できたことを、運営を掌る事務局として感謝の念は尽きません。

毎回コンクールを心待ちにしている音楽ファンが、県内はもとより県外からも駆けつけ、第1次予選から熱心に演奏に耳を傾けていました。

第1次予選の通過者はわずか19名、そして、オペラ全曲から指定された場面を歌う第2次予選でその数は更に絞り込まれ、本選に臨むファイナリスト6名が決まりました。

大ホールを埋めた観客が見守る中、日本人2名、韓国人4名(ソプラノ4名、バリトン2名)のファイナリストは、現田茂夫

氏率いる神奈川フィルハーモニー管弦楽団の伴奏で、それぞれ渾身の歌唱を披露しました。

残念ながら第1位の該当者はいなかったものの、ウィーンに留学中の吉田珠代さんが、「ラ・ボエーム」より<私の名はミミ>と「オテロ」より<柳の歌～アヴェ・マリア>を歌い、第2位と併せて三浦環特別賞を受賞しました。

過去5回の入賞者の中には、メトロポリタン歌劇場、ミラノ・スカラ座、ウィーン国立歌劇場、パリオペラ座、英国王立歌劇場など世界の一流劇場で活躍している者も少なくありません。吉田さんがこの受賞を機にこの先人たちの後に続くよう願ってやみません。

また、コンクールは準備段階を含め長期間に亘り、地元のボランティアを始め、多くの方々に支えられてきました。前回からコンクール運営に携わっている本学は、地域社会と協働し、静岡から世界へと広がる“しずおか文化”創造の一端を担っています。



会場周辺のコンクールフラッグ



第2次予選



本選での吉田珠代さん



結果発表



記者会見



表彰式

○前期公開講座

イタリアの創造力 ~デザイン、芸術、産業~

【会場】静岡文化芸術大学 (南棟2階 278大講義室)
【時間】13:30~15:30 (質疑応答・休憩含む)

「出会う 感じる 創造する」をモットーとして掲げる静岡文化芸術大学にとって、イタリアの文化と伝統を学ぶことは、人類の創造性の源を知る上で欠かせません。また近年、「創造都市」とのコンセプトに関心を寄せる浜松市は、イタリア都市のありかたに深く共鳴しています。今後の本学とイタリアの諸大学との研究・教育の連携強化のためにも、多くの一般の方々とともに、創造性あふれるイタリアの伝統と革新の力をあらためて学ぶ機会とします。

第1回	5/26(土)	イタリアの大学と都市 — 最古の大学を擁するボローニャの例から	土肥秀行 (文化政策学部 国際文化学科)
第2回	6/2(土)	イタリアのデザイン — 魅了する造形美、もの作りの心を探る	谷川憲司 (デザイン学部 生産造形学科)
第3回	6/9(土)	現代都市ローマ — “永遠の都”のさらなる変貌	高田和文 (文化政策学部 芸術文化学科)
第4回	6/16(土)	日伊の恋愛詩 — 愛を叫ぶイタリア人、恋を思う日本人	エドアルド・ジェルリーニ (東京大学外国人特別研究員)
第5回	6/23(土)	イタリアの産業と都市 — 北イタリアの工場都市と第三のイタリア・ボローニャvs浜松	根本敏行 (文化政策学部 文化政策学科)

受講資格 高校生・大学生・一般社会人

募集定員 各講座120名(先着順)

受講料	受講者区分	金額	お支払い方法
	一般・大学生	3,000円/全5回	振込依頼書をお送りしますので、 払込手続きをお願いします。 事前に「全受講証」を お送りします。
		1,000円/1回	当日、受付時に現金にて お支払いください。

※高校生、本学学生の受講料はすべて無料です。

受付期間 平成24年4月6日(金)より※定員になり次第締め切ります。

お申込み方法 電話・FAX・E-mailのいずれかで下記宛にお申込みください。
お申込みの際の必要事項は下記の通りです。

■氏名(フリガナ) ■郵便番号 ■住所 ■電話番号
■受講者区分 ■受講希望日

**お申込み
お問合せ先**
〒430-8533 浜松市中区中央2-1-1
静岡文化芸術大学 企画室
TEL: 053-457-6113 FAX: 053-457-6123
E-mail: oubo@suac.ac.jp http://www.suac.ac.jp/

○風の記憶 山本一樹展

浜松市美術館 2012年4月14日(土)~5月20日(日)
開館時間 9時半~17時
休館日: 毎週月曜日 但し4月30日(月)は開館
観覧料 大人500円 大・高・専門生250円 中学生以下無料
※70歳以上の方・障害者手帳等をお持ちの方及び介護者1名は半額
※団体割引有り
主催 浜松市美術館 共催 静岡文化芸術大学

関連イベント

作家講演 「鍛金技法と作品制作」及び作品解説(参加は無料ですが、本展観覧料が必要です)
日時 4月22日(日)14時~
会場 浜松市美術館2階講座室

編集後記

今年2012年は日本のオリンピック出場100年、日本が初参加した1912年のストックホルム大会から1948年のロンドン大会まで、オリンピックではスポーツ競技とともに絵画、彫刻、文学、建築、音楽などの「芸術競技」が毎回開催されていました。スポーツも芸術も“技を競う”ことは単に優劣を決めることではなく、開催都市に集い、交流し、そこから新たなものを創造する、そのような場としてオリンピックが位置づけられていたということなのでしょう。この「集結・交流・創造」は大学が持つべき機能でもあります。本紙からそのような“SUACの一コマ”をお届けできれば幸いです。(St.)

Art & Culture

文化・芸術研究センター
Vol.15

文化・芸術研究センター
ニュースレター

March, 2012

発行人: 三枝成彰 編集人: 富田晋司
発行: 静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
(事務局 静岡文化芸術大学 企画室)

